



の課長だった。年令も私が一年おくれの大正三年生れで殆ど同年令だった。

当時、私も太田邸とは白米と離れてない駒込千駄木町三七に居住、従って私の家の前が通勤路で私も時間の都合で一緒に通勤したことも屢々だった。大変温厚な紳士でサスがに貴族出身のプリンスだった。

終戦後、太田さんは遠く田端、林町、千駄木町などに広大な地所を米軍司令の土地改革に従って分売、譲渡などで数名の職人を連れ、ボール、メジャーを持って測量に懸命だった。私にもご希望があれば分売しますよとお声をかけて頂いた。私はその頃、既に日本医大近くに地所を購入していたのでお言葉だけは有りがたく頂戴しておいた。私と太田さんとはこのような思い出があったのである。

翻って京の都では室町幕府が足利善政を將軍職に就けていた。しかし、妻の日野富子は猛妻と呼ばれた通り、権力の女性で夫善政が後継相続に弟を指名、富子は腹を立て実子を主張、これに各武将達も真ツ二つに分かれ、管領（番頭格）の山名宗全と細川勝元が対峙し、戦端を切ったのである。これが応仁の乱である。この頃、都は社会秩序、人倫道徳は紊乱し、一般下層階級は極貧に喘ぎ、盗賊、殺人は頻発、横行、階級者でも実力の伴わない者は下級層にバカにされ、所謂下剋上の風俗が漲り、各地で争乱が始まった。

僧兵の反乱、百姓一揆など相次ぎ、都は争乱の坩堝と化したのである。

関東も京の紛争と連動したのか、争乱が始まった。この寸隙を縫って京都の足利幕府の足利氏は

関東鎌倉に下向、関東管領を設置、関東將軍として自らの四男 基を争乱に対する元締としたのである。

なお、尊氏は関東管領を設置する時同時に全国制覇の野望を立てて北方に奥羽管領、西国に九州探題を立ち上げたのである。

関東管領を設置すると関東は関東公方として三大勢力の実力者が蟠居することになった。

一方は山内上杉（上杉顯定）他方は（上杉定正）の二大公方が対峙した。

この外に格下の足利 成氏（尊氏の息子）が勝手に公方を僭称、占河に立て籠った。無論、これは足利尊氏のお墨付がないのでエキストラの番外だ。

関東管領の領土経綸、政治手法は流石に尊氏の師導をみて育ってきただけに治安は確立し、民心は安定、好評を博した。この実績が京都を凌ぎ関東管領は権勢を揮った。この勢いをみた両上杉は驚いた。関東管領と両上杉の關係は悪化し、関東大争乱の幕開けとなったの

である。同時に山内上杉の家老長尾景信の子景春は執事に父が弟の忠景を昇格させた為腹を立て関東争乱に一層の拍車をかけることになった。

怒り心頭に発した景春は古河公方と手を結び地方の豪族を手中にし、虎視眈々と狙っていた。

東男の道灌は将来を見据え、江戸は関八州の中心になると位置づけ、逸早く、江戸城を築城（道灌は当時から名だたる築城家でもあった）隠然たる勢力を持つていた。

道灌は関東争乱の芽を摘み、民心の安定と平和を願い、景春の調整役を伝えた。しかし、景春は道灌の成功に依る威力を牽制する意味で断乎として拒絶した。

道灌は幼時、神童と謳われただけに先見性に富み、才氣煥発、氣力吐溢、ダイナミックな志を秘め、縦横無尽に活躍する武將だった。

彼の快刀乱麻の兵法は早くから敵も身方も秘かに恐れていたのである。

道灌が紛争地の偵察、和平のNo.ハウなどで鎮静化を模索し、江戸城に帰ってきてみると突如としてハブニングが起っていたのである。

かねて、前記の通り、執事を外された両上杉不快感を抱いていた長尾景景春が謀反、一気に道灌潰しに取り掛り、江戸城包囲を立ち上げたのである。各地の豪族もこれに同調、此処、彼処で武装、蜂起した。

先頭をきつたのは武州豊島郡、足立郡、新座郡などを領有した豊島氏だった。

そのアト、宮城、滝野川、板橋、志村、赤塚の諸十が相次いだ。

長尾景春は相模の小磯城、溝呂木城に立て籠もり、満を持した。

流石の道灌も単独では戦えないと断じ、両上杉軍に援助出兵を要請した。

知略の謀将道灌は巧妙な采配を揮い、両上杉軍団と連繫、素晴らしいブレールで機能を発揮次々と敵陣を撃砕、占拠して行った。

道灌軍団は勇猛、果敢で機敏な武士を集めて特訓を受けた道灌自慢の通称、足軽隊が切り込み、敵陣を攪乱、何処の戦いも先頭をきっていた。溝呂木城軍、小磯軍は敵前逃亡したり、白旗を掲げて降服し、豊島軍は司令官、泰経が戦死、兵員達も多数戦死して敗走した。かくして敵の江戸城攻略作戦は失敗、道灌は領土を拡大、関東中央部の軍師として君臨するに至ったのである。

しかし、武蔵、上州の戦線は依然として風雲を告げ、長尾景春は足利氏、古河公方などに援軍を要請、その軍勢は万余の大軍を算えるに至ったのである。

長尾、足利の連合軍VS両上杉と道灌軍は江戸城で対峙、交戦準備で表面の駆け引きと水面下の交錯と模索がオーバーラップし不気味な風雲が漂ってきた。

その中、季節の推移と共に寒風吹き荒び、豪雪となった。両軍は根比べの状況となった。その中、長尾軍は状況不利と判断、撤退し、足利軍は和睦を申し込んできた。しかし、両上杉軍と道灌軍は足利軍の申し入れは諒承したが長尾軍は容赦せず、追走、総攻撃をかけた。司令塔の道灌は秘蔵の足軽隊を縦横に駆使、次々と落城、陥落した。

しかし、この状況を秘そかに眺めていた豊島軍は道灌軍の手薄になった間隙を衝き、手塚城に立て籠り、日前の上杉軍を撃破して江戸城の占拠を目ざす作戦を立ち上げたのである。これに勢いを得た長尾景春軍団も蠢動し始めた。道灌は「長尾の野郎、この旋じ風奴許して置かぬぞ」と高らかに嘲笑した。

しかし、景春は再び足利軍に救援を求めた。千葉の豪族達も一斉に蜂起、知略縦横の謀将道灌の強大な軍団をこの際、叩き潰せとばかり、経春を中心に大軍団を組織、江戸城攻略に走ったのである。しかし、その中、関八州の豪族達はバラけて自らの領土拡大確保に目が眩み、敵味方の別なく戦火を交え、関東一円は燎原の炎の垣と化した。

各地の火災は昼夜の別なく、宙天に燃え上がり、戦死者は累々と重なり合い、無秩序の凄惨な戦場は手の施しようがなかった。

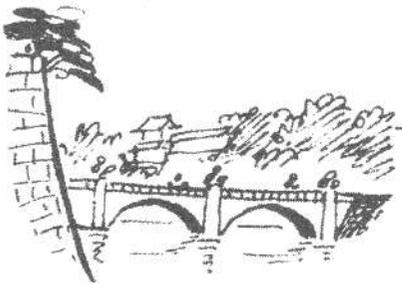
これを案じた古河足利軍は京都の兄、尊氏將軍に戦火の鎮定と調停を申し込んだ。

將軍は関東に軸足を置いた鎌倉の関東管領の威光を示す絶好のチャンスとみて即座にOKのサインを出し、京都の権威を背景に関東も手の中に納める策略を立てた。

しかし、関東はその頃、もはや道灌軍団が洗練された足軽隊を含め、強大な兵力を掌握、攻撃を仕掛けることは出来なかった。

こんな状況を見て両上杉軍も長尾軍も道灌軍を共通の天敵として将来を恐れ、おののいていた。しかし、関東の一般民衆は争乱の鎮圧、平和を維持してくれるのは道灌を措いて外にはないと尊崇していた。道灌は関東民衆のスターであり、憧れのシンボルでもあった華麗なる武将だった。

手の施しようのない関東の大争乱も最後は道灌の巧妙な作戦と知略でケジメをつけ、関東に平和の旗が翻ったのである。(つづく)



# 町会活動の概要

平成十四年七月から  
平成十五年一月まで

## 総務部

- 14年 6/12 定期総会・懇親会 27名出席
- 6/13 四町会集会(連合御輿について)
- 9/7 定例役員会(祭礼準備打合せ)
- 9/21 根津神社祭礼
- 9/29 祭礼反省会 30名参加
- 10/5 前期会計決算報告
- 11/17 向丘地区町会連合まつり

## 婦人部

- 6/26 清掃事業優良会員感謝状 2名 奥沢・芝田
- 6/26 施設見学会
- 6/26 H赤奉仕活動 くすの木郷
- 7/23 根津神社 つつじ苑除草
- 9/9 敬老天ぶら会 320人 海蔵寺
- 9/12 敬老祝い品のお届け 49名
- 9/19 秋の全国交通安全の集い
- 10/1 赤い羽根共同募金 卒一九八、三〇〇
- 11/7 御協力有り難う御座いました  
日赤奉仕活動

## 交通部

- 6/13 コミュニティーゼーション協議会
- 6/28 駒込交通安全協会理事会

## 防火防災部

- 9/21 秋の交通安全運動 街頭指導  
かねこ前交差点
- 10/16 交通部長賞 三宅町会長受賞
- 11/30 部反省会
- 9/1 文京区総合防災訓練  
東大グラウンド
- 11/10 防災コンクール  
駒本小学校

## 防犯部

- 9/18 地域安全全体会議
- 10/11 文京四署地域安全の集い  
区民センター
- 10/15 春の地域安全運動

## 青少年地区対策委員会

- 10/27 ポイントフリー実施 東京大学
- 11/10 地区対40周年記念  
9地区合同行事  
教育の森文京スポーツセンター

## 計報

当町会の方で平成十四年七月〜十五年一月にご逝去された方は左記の通りです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 小林佐一郎 様(九才) 向丘2-36-8
- 豊田 重彦 様(七四才) 向丘2-38-24
- 中川 允子 様(七九才) 向丘2-36-8
- 青樹 義昭 様(七二才) 向丘2-28-9
- 高木 清 様(八一才) 向丘2-30-4

## 蓬萊句壇

- 冬茜肌差す風の浜に立つ 青木 沛寿
- 冬の居間長押に残る鯨尺 福山 七重
- 教会の尖塔光る冬茜 船橋 小糸
- 山脈の上に星満ち狐鳴く 彦坂つぐを
- 夜半に醒め毛布二枚を掛けたしぬ 津久井たかを
- 白壁のピルを染めけり冬茜 由川玉寿郎
- 都鳥かくも集へば人恋し 野出 園蛸
- 狐コンコン疑う顔してまた走る 小野 向雪
- 女医時に迷い回りけり銀狐 池田 連木
- 暖房に酔い回りけり山手線 池田 連木
- 狐火の袖にまたぎの好々爺 池田 連木
- 紅葉散る庭に史跡の老舗宿 池田 連木
- ふうはりと木枯らし街の角曲がる 池田 連木
- 冬茜鐘撞堂は鐘の色 池田 連木
- 狐火や柵田の脇の墓どころ 池田 連木
- 冬茜天女の羽衣あためため 池田 連木
- 暖房にだらける猫と主かな 池田 連木
- 冬茜屋根屋に後嗣無しと言う 池田 連木

## 編集後記

六十三号を出してからあつと云う間に新年を迎えてしまいました。世の中には色々な変転がありました。が町内には大きな出来事はありませんでした。しかし世界には不穏な気配が漂っています。羽村野石の句に「大いなる日の昇り来し今年かな」があります。平成十五年という年は希望と意欲を持って力強い歩を進めたいものです。

- 編集委員 三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕
- 青木喜一 池田 暉